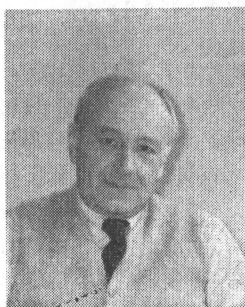


素顔 '88

(7)



帝王 P. Morel

仏気象界の帝王として、欧州に君臨している感のある、WCRP 事務局長の P. Morel に話を聞いてみました。

問：まず略歴を聞かせて下さい。

—パリ大学の Ecole Normal Superior を卒業して、大学院へ行きました。物理学科を卒業して、超流動の研究をしていました。そして、1962年に French Space Agency に入り、開発と研究の仕事に従事することになりました。1964年から EOLE 計画の仕事に従事しました。この計画は最初アメリカ人が提案したのですが、US では reject され、France が support して押し進めたものです。この過程で modelling の重要性を知り、GCM を走らせることにもなりました。Arakawa と Mintz の協力を受けました。この間、我々は、測器の開発と、モデリングと両方やっていたわけです。この間に (1968)、LMD を創設しました。と云っても、既に存在していた別の組織を改組したのです。ですから、私は、次長になりました。実質は私が切り盛りしていましたが。

Meteosat も、最初は、フランスの独自の予算で研究していたものです。sensor もフランスが開発していたものでした。その後ヨーロッパの他の国も参加することになりヨーロッパ全体のものとして運営することになりました。非常に進んでいる国 (仏) と何も知らない国が一緒にするのですから、何事も、非効率的に行われるはめになりましたが、それはそれで仕方がないことでし

う。

問：ECMWF についてはどうですか？

—ECMWF も出発当時は、各国気象局の共通の理解はなかったと思います。当時は、各国気象局の力量が弱く、そのようなところまで手がまわらなかったからでしょう。但し、欧州で重複して同じような施設を持つことは馬鹿げています。

問：FGGE にはどのような形で参加したのですか？

—satellite の専門家として参加しました。そして、data management (level I, II, III の concept など) の仕事を行いました。FGGE は、最初は、Charney などにより提案されましたが、現実的な案にしていったのは私がやったと思っています。

問：将来は、どのように考えていますか？

—今は、WCRP の事務局長ですから、WCRP がうまく行くことを願っています。が、第2回全球実験として、GEWEX を最重要課題として考えています。WCRP が GABP に相当し、GEWEX は、FGGE に相当するものと考えています。

問：IGBP についてはどうですか？

—IGBP は、ICSU の project で、WMO との joint の project にはまだなっていません。但し、IGBP について欧州とアメリカで大きな見解の相異があるように思います。欧州では、地球環境の物理的側面を WCRP で、化学的、生物学的側面を IGBP でという様に分けていますが、米国では、全球的な環境変動を IGBP の目標と捉えています。しかし、まだ、良く組織されているとは云い難い状況です。

問：日本についてのコメントは？

—ヨーロッパ人には、奇妙でよそ物に思えます。行動様式には、困惑させられるばかりです。物事を始めるまでは非常に遅く、始めたら仕事は非常に良くやり遂げるという感じです。しかし、この遅れはしばしば致命的な誤りを引き起こします。日本は、project の計画段階では全く物を云いません。参加しないこともままあります。そして、計画が決定してから云って来ます。そこには、誤解もありますし、手遅れということもあります。

日本の問題は次のようなところにあると思います。まず第一に、日本の中では、省庁間の壁が非常に厚く、互いに良く話し合っているとは決して思えません。時には、部局間の話し合いもうまく行っていないように思われます。それ故に、全体が調整されているようには思えないのです。第2には、人事が頻繁で、2年位で人が

どんどん変わることです。これでは、外国人が、定常的なコンタクトを作ることが不可能になって来ます。そして第3は、国際的な communication の不足です。これはしばしば戦略的な誤りを引き起こします。例えば、MOS-1です。この衛星は、ほとんど、国際的な impact を引き起こしていません。何が必要かという need を調査していないし、成果を積極的に売り込む事をしていないからです。それに比べ、フランスの SPOT の事を考えてみて下さい。SEASAT でもそうです。3カ月の命でしたが、そのデータを使いたい人は、今でも沢山います。事前の communication の不足は、投資した資金の割に、国際的な impact を弱めることとなります。日本の企業は、必要なら、自分達で外国の市場を調査し、商品を持って外国市場を席卷してゆきます。商売ならこれでも良いでしょうが、科学では、こうはいきません。もっと良く communicate すること、もっと良く話すことです。

問：若い人達に云いたい事は？

—do something else. この分野は、ほとんど establish されて来ていて、数多くの先達がまだ現役として頑張っています。残っているところを探すのは、段々と大変ななっています。但し、物事を狭い視野で把握するのではなく、global に把握すれば、まだまだ問題は残っています。例えば、global ocean circulation などは、その最も良い一例だと思います。

私は、物理学者で気象学者だとは思っていません。私はノーベル賞をとれるものだけが、物理で、他のものは物理の応用、云わば、技術の分野に属するものだと考えています。気象学の本質は、技術の面にあると考えてい

ます。ですから、現実に応用して結果の出るような仕事が必要で、simple model の様な仕事は、一つあれば良いので、他は、現実の問題を理解すべきです。Feymann が、「科学を進歩させるのは、純粋数学者か、物理学者で、応用数学者ではない」といっていますが、私もそのように考えています。

眼をむいて、良く話す Morel の姿は、ドゴールに代表される“フランスの栄光”主義者の影を感じさせました。事実、Morel が WCRP の事務局長になってから、いろいろな所で trouble がありますが、何となく物事の筋道が理解出来たように感じました。とりわけ、フランスは、衛星に強く、これを主体とした観測に関してはヘゲモニーをとれるが、海の船を中心にした力量は極端に弱く、英米に負けるというものなのでしょう。だから、彼は TOGA WOCE に対し批判的で、GEWGX に力を注ぎたいとのことのように読みとりました。

日本への批判は耳の痛いところです。「決して世界の中でヘゲモニーを争おうなどは決して考えてもいなかった日本（勿論、日本の中にはそう考えたグループもあるでしょうから、ここでは気象・海洋の意味）が、企業が自身のために頑張った結果、突如、世界の注目を浴びて、困惑している」といったところでしょう。何と云っても、40年前は、何もなかったのですから、そう急に、「金持国」の立居振舞が身につくわけはありません。（それに、本当のところ、気象の面に関しては、さして金持国でもないのですが）。急がばまわれ、かもしれません。

（東大・理 住 明正）



WMO と IAEA, 原発事故の通報実験 を行う

世界気象機関 (WMO) と 国際原子力機構 (IAEA) は、1988年1月と2月に行ったテストで、GTS が、原発事故のような緊急時に情報を各国政府に数分以内に通

報するのに効率的であることを示した。先に、地下核実験のモニターに GTS が使われたことがあり、今後共 GTS のこのような役割は増加すると思われる。（住）